

人間とは

1: 造られ、祝福を受けた存在

聖書は、人間は偶然の産物ではなく、目的を持って造られた存在だと教えています。神は創造主であり、人間を含むその他のすべてのものは、神による被造物（造られたもの）です。



創世記1章26節

神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」

ここでは、創造主なる神が、人間を造る計画をしておられます。「われわれ」とは、3つの神が存在しているということではなく、父、子、聖霊という3つの側面をもつ唯一の神を指します。26節の前には、この宇宙、また地上の自然や生き物すべてが神に創造された記述があり、最後に造られたのが人間だったのです。人間には、それらの被造物を世話するように、という役割を与えられています。



創世記1章27節

「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」

人間は、特別なかたちとして造られました。男性、女性、それぞれに大切な役割を持つ存在、また助け合う存在としても造られました。続く28節では、「神は彼らを祝福された。」とあります。私たちの存在は、神のよって目的が与えられおり、祝福されているのです。神は、造られたものすべてを「よしとされた」、とあります。

2: 本来の目的を失った状態



創世記3章1-7節

「さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾（こうかつ）であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」

女（エバ）は自分の力と知恵に頼って生きていけばいいじゃないか、との誘いに惹かれていきます。蛇の格好を装ったサタンは、その実を食べても決して死なない、と神の言われたことを否定しています。女は、自分の力で賢くなれる、という惑わしにのってしまい、神の唯一の命令（一つの木からの実を食べてはいけない）を破ってしまいます。それは、神を拒絶したということです。

ここで、自分たちが神との愛の関係を拒み、神の基準に背いたために、元々の神のご計画の中において本来不要な「恥」というものが、人間の心に入って来ました。この後に続く話を見ると、人間が罪悪感、悲しみ、後悔、責任転嫁などを体験するようになったことがわかります。アダムとエバは、不従順のために神と親密な交わりを持つことができる園から追い出されたので、それ以来、人は以前のような神との関係を持つことができません。神と人之间には、隔てる大きな壁ができてしまったのです。

このことを聖書は、人は生まれながらに罪人である（原罪）、という人間の性質について教えています。人類の祖先であるアダムとエバが罪を犯し、その子孫にあたるすべての人間もその罪を引き継いでいるためです。

3: 体、心、霊

人間が創造された時のことが、このように書かれています。



創世記 2 章 7 節

「その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。」

人間は、体、心、霊という部分から成り立っています。体とは外に見える姿であり、心とは感情や意思決定の能力も含みます。動物にも体と心が与えられていますが、人間だけが、「霊」という部分を備えられています。これは、先に見た創世記1章26節にあるように、創造主の「かたち」として造られたのが人間だけだからです。また、ここでも神が人に「その息を吹き込まれた」とあることから、人は霊のいのちに生きるものとして造られたことがわかります。

人間には理性が与えられています。神を知ることができ、また神との関係を持つことが可能な存在だとわかります。ところが、先に見たとうり、人間は神との交わりを失った状態にあります。つまり、霊の部分が死んだ状態にある、と言えます。霊的に死んだ状態である（神から離れている）ため、神についてや、神が持つ真理を霊的な目で見ることはできません。



イザヤ書 5 3 章 6 節

「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分勝手な道に向かって行った。」

聖書では、人間が羊にたとえられている箇所がたくさんあります。羊とは、羊飼いなしでは好き勝手なところへ行ってしまう動物で、崖から落ちるような危険な場所へもわからずに進んでいきます。人間の多くも、このような状態にあるので、何のガイドもなく、自分の力で道を切り開き、自分の力で傷や疲れを癒そうとし、自分の願いと欲を常に追求しています。つまり、罪の中に生きているのです。

次のレッスンで、「罪」について、もっと考えてみましょう。